

日本語と英語における話題終結の相互行為： ポーズの使用に焦点を当てて

大谷麻美

1. はじめに

我々は、会話における話題管理に関して、普段はあまり意識をすることはない。どのように新しい話題を導入し、展開させ、終結させるのかは、ほとんど無意識に行っている。しかし、異なる言語の話者と話すとき、時に話題の管理方法に違和感を持つことがある。これは、話題管理の行い方が言語文化によって異なることが要因であることは想像に難くない。しかし、話題管理が会話参加者間の相互行為である点を考えると、異文化間のコミュニケーションでは、その相違は、単なる違和感だけではなく誤解や摩擦の原因になる可能性もある。

本稿では、話題管理の中でも特に話題の終結方法に焦点を当てる。会話の中で、相手の話に関心がないとき、もはや話すべきことがないとき、時間等の何らかの都合で話を早く切り上げたいとき、他にもっと話したいことがあるとき等は、唐突ではなく相手に失礼にならないように話題を終える必要がある。しかし、どのように話題を終えるのかは、話し相手との対人関係にも影響する可能性があり、話題管理の中では比較的困難を伴いやすい部分である。まして、それが自らの母語以外の言語であればなおさらである。本稿では、日本の英語教育への応用を視野に入れ、日本語と英語の話題終結部の相互行為のあり方を明らかにする。とりわけ、日本人に顕著な特徴と指摘されているポーズの使用に焦点を当てて分析を行う。

2. 先行研究

2.1 話題

自然談話の中の話題 (topic) は、常に移り変わり特定することができないものとする考えが一般的である。自然談話は、多くの場合、定まったゴールを持って話されておらず、その話題も時々で移り変わっていく。そのため、話し始めと話し終わりでは、その内容がすっかり変わってしまっていることも多い (e.g., 南, 1981; Brown & Yule, 1983; Foppa, 1990; 村上 & 熊取谷, 1995)。Brown & Yuleは、このような話題の特徴はその関連性 (relevance) と連続性 (coherence) にあり、そのため、あえて談話の中の話題を特定しようとすると、それは直感的になり失敗しやすいと指摘する。つまり、話題は常に先行する話題と関連づけて話され、連続的に推移していくものなのである。

さらに、このような話題の推移は、単独の話し手によるものではなく、会話の参加者たちの協働作業 (joint production) でもある (Bergmann, 1990, p.204)。また、串田 (1997) によると、話題とは「伝達されるものではなく」「会話者たちが相互行為的に作り出す」ものであり、また、それが社会的相互行為である以上は、話題の関連や連鎖の仕方には、何らかの規範性があるはずだと指摘する (p.177)。

2.2 話題の終結部

話題は導入された後、関連性を保ちながら移り変わり、最後にその関連性が途絶えて話すべきことがなくなったところで終結する。そしてその後、再度、新たな話題が導入される。この繰り返りで会話は進んでいく。本稿では、このような話題の流れの中でも、特に話題の終結部に着目する。終結部に関する研究はすでに多く存在するが、以下では、1) 終結部に見られる談話指標、2) 終結部の相互行為、3) 終結部の相互行為の日英対照研究の3つの観点から先行研究を概観する。

2.2.1 話題終結部に見られる談話指標

話題の終結部に現れる談話指標に関する研究は、比較的蓄積が多い (e.g., Reichman, 1978; メイナード, 1993; Holt, 2010; Riou, 2017)。これらの研究によると、話題の終結部には以下のような指標が現れやすく、また、これらが組み合わさって現れることも多い。

1. 沈黙やポーズ

沈黙やポーズは、先行する文脈に関連づけて話すことがもはやないことを意味する場合が多い。

2. プロソディーの変化

先行する文脈に関連付けて話すことがなくなると声のトーンが落ち、小声になり、話し方が間延びをする。しかし、その後、新たな話題が導入されると、声が再度高く大きくなり、話し方も速くなる。

3. 限られた反応¹⁾

実質的発話が生じず、先の話者の発話をただそのまま繰り返したり、互いにあいづちだけを打ちあったり、笑いだけが起ったりする等の、話題を進展も否定もしない反応。

4. まとめや評価表現

「…という訳なんだ」等のまとめ表現や、「良かったね」等の評価表現。これらは、それまでの話の流れを締めくくるために使用される。

2.2.2 話題終結部の相互行為に関する研究

会話分析の研究では、話題管理の相互行為について詳細な記述がなされている。Sacks (1992) は、会話参加者たちが、先の発話者の話題と関連付けながら話題を推移させる様を描写し、それを stepwise-movement と呼んでいる。一方、Button & Casey (1984, 1985, 1988-89) は、stepwise-movement 以外にも、話題を明確に区切りながら推移させる boundaryed-movement の様子を細かく分類している。また West & Garcia (1988) も、話題の転換には協働的転換 (collaborative topic transitions) 断絶的転換 (topic transitions after prior topic extinction) 一方的転換 (unilateral topic transitions) の3つを挙げてい

る。これらの研究から、話題の推移には、Sacksが指摘するように関連性を保ちながら展開させる場合と、Button & Caseyや West & Garciaが指摘するように、何らかの方法で明確に終結して区切りながらすすめる場合があることがわかる。

Schegloff & Sacks (1973) は、明確に話題を終結させて区切るための相互行為として possible pre-closing の存在を指摘している。これは、話題が終結する前に、参加者が終結を提案し、相手が受け入れる相互行為で、‘Okay’ や ‘We-ell’ 等の発話を交換することで、これ以上話すことがないことを示して、話題を終結することに合意を取り合う方法である。

また、上の研究を受け、Schegloff (2007) は possible pre-closing をより詳細に分析し、以下の3つのターンから成り立つことを指摘している。T1：話題の終了の提案、T2：相手による終了の受け入れ、T3：話題終了語句。

このように、会話分析は話題の終結の相互行為の実態をつまびらかに記述しているが、一方、言語文化ごとでの相互行為の相違等は関心の外にあり、それらの比較対照は行われていない。

2.2.3 話題終結部の相互行為の日英対照研究

話題終結部の相互行為を言語間で対照する研究はまだまだ多くはないが、日本語と英語の対照研究としては Yamada (1992) を挙げるができる。Yamada は日本語とアメリカ英語のビジネス会議の談話を、話題管理の相互行為の観点から比較分析している。その中で話題の転換点（話題を終結して新たな話題に移る点）に、英語話者以上に日本人がポーズを多く用いることを指摘している。ただ、Yamada の研究は、職場での役職や会議での任務と話題の管理の関係に焦点をあてたものである点で、限定的なコンテキストの事例研究といえる。また、データ数も非常に少ないため、より広域にデータを取ることで両言語の特徴を見る必要がある。

3. 問題の所在と本研究の目的

以上の先行研究から、会話分析の分野では話題終結の相互行為の特徴はかなり明らかになってきていると言えよう。しかし、それぞれの言語ごとの特徴を明らかにした研究はまだ非常に少ない。日本人英語学習者が、英語の会話で話題に参加できない、話したくても口をはさめない等の問題を抱えているという指摘は多い (e.g., FitzGerald, 2003; 寺内他, 2008)。それは、Gumperz (1982) が指摘するような、各言語での相互行為の文化的コンテキストが理解されていないためだと考えられる。このような問題を解決するためにも、各言語での話題管理の相互行為の特徴とその解釈のされ方を明らかにすることが必須であろう。

本稿では、Yamadaによって指摘されている日本人のポーズの使用に着目しながら、談話分析の手法を用いて以下の2点を明らかにすることを目的とする。

1. 日本語とオーストラリア英語のそれぞれの母語話者の間で、話題終結の交渉がどのように遂行されるのか。
2. その際に、両言語でポーズがどのように用いられ解釈されるのか、また、そこに相違があるのか。

4. 定義

本稿では、上記の先行研究を受けて、話題を「会話の中で話されることで、参加者たちの相互行為を通じて関連性を保ちつつも移り変わるもの」と定義する。また、話題の終結部とは、boundaried-movementによって明確に話題が区切られた箇所を指すこととする。終結部の認定は、上の先行研究で示された終結部の談話指標が現れ、かつ、その前後で話題の連続性と関連性が途切れている箇所とした。また、本稿で扱うポーズとは、会話の中で言葉が発せられない部分を指すこととする。

5. データ

日本語とオーストラリア英語（以下、英語とする）それぞれの母語話者による会話各8本（日本語会話JA1-8、オーストラリア英語会話AU1-8）、計16本をデータとして用いた。各会話は30分で、計8時間のデータである。参加者間の性別や年齢による力関係を極力排除するために、参加者はすべて男性、年齢は20代から30代前半の者とした。また、彼らの教育背景にも大きな違いが出ないように、大学卒業生、または、大学院生とした。参加者が各言語の母語話者であることは、事前にアンケートで確認を行った²⁾。日本語データは東京で、英語データはシドニーで録音・録画を行ったが、参加者の出身地は各国の広域にわたっていた。会話は、すべて3人1組で行い³⁾、この会話の収集のために集められた初対面の者同士の会話であった。極力自然な会話データを得るために、設定場面も初対面の会話とし、教授宅のホームパーティーで初めて会い、教授が食事の準備に席を外している間の会話とした。この設定以外は、自由に会話を行うように指示をした。各会話では、参加者は簡単な自己紹介から始め、様々な話題へと進んでいった。

会話は、録音と録画後、文字おこしをしてデータとして利用した。英語の会話に関しては、文字おこし後、英語母話者による点検を受け、誤りがないことを確認してから使用した。

6. 分析

6.1 話題終結の発生数

まず、各会話での話題終結の発生数を見た。

表1 日本語と英語の会話の話題終結部の発生数

Group No.	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
Japanese	17	7	10	7	3	17	2	13	9.5
AUS English	4	2	2	5	2	5	3	1	3

表1は、それぞれの会話で見られた話題終結部の数である。30分間の会話での話題終結部は、平均で日本語が9.5か所、英語が3か所で、日本語では英語の3倍以上多いことがわかる。これは、日本語話者が話題を頻繁に区切りながら話していることを意味する。特に日本語会話1と6では、それぞれ17回となっており、平均すると1つの話題が2分と継続していないことになる。それに対し、英語会話2、3、5、8では、30分の会話中で1-2か所となっており、一度話し始めると、先行する話題と関連付けて平均で10分余り話し続けることがわかる。

以下の会話例1は、日本語の会話の話題が短時間で終結して、次の話題へと移行する例である。この会話では、3人の参加者（J36、J40、J42）が、J42が参加していた大学のESSクラブの活動について話している。しかし10行目で、J42が「まあ学部の頃はよくお世話になりました」とESSクラブについてまとめの評価となる発話をしている。これは先行研究でも指摘されている話題終結の談話指標である。それと同時に、J36も「ふうん」と限られた反応を返すのみである。これらの発話は、この話題についてそれ以上話すべき関連話題がないことを示しており、事実、その後3.6秒の沈黙が生じており、ここで話題が終結したと判断できる。沈黙の後、J40が、それまで主な話し手であったJ42からJ36の方へと向き直り「あれ、サークルとかは何かやられていました」と問いかけることで、J36のサークル活動についての新しい話題が導入される。しかし、この話題も長くは続かず、34行目で、J42の「なるほど。いやあ」という限られた反応の後に2.4秒の沈黙となり終結している。そして35行目で、J36が「バイトとかされてますか」と、再度新たな話題を導入している。この例から、日本語の会話では、一つの話題は、まとめの評価発話、限られた反

応、ポーズ等の談話指標を用いながら明確に区切られながら、細切れに話されていることがわかる。表1の日本語の話題終結部の多さは、Sacksらの言う stepwise-movement よりも、boundaried-movement によって明確に話題を終結させながら会話を進めた結果と言えよう。

会話例1 (JA3)⁴⁾

- 01 J40: あ じゃあイメージと違う。@@
02 あ でもなんかESSで大会とかちよいちよいはありますよね。
03 J42: [ありますね]。
04 J36: [ふ: :ん]。
05 J40: T.I.Tech ってありますね。T.I.Tech Cupですけど
06 正式名称。
07 J40: ° T.I.Tech Cup °。え おもにディスカッションですか↑
08 デイバートか何か=
09 J42: =デイバートですね。(1.2) もう まあ もう 4 5年行っていない
10 ですけど まあ学部の頃はよく [お世話になりました]。
11 J36: [ふ: :ん]。
(3.6)

=====

- 12 J40: あれ サークルとかは何かやられていました↑=
13 J36: =サークルは特にやっていなかったんですけど地元の
14 もと ずっとサッカーをやってて その僕が小学校のとき行ってた
15 少年団の何て言うんですかボランティアで (.) コーチをしている
16 というか。もう シュ もう高校2年ぐらいのときから
17 J42: うん。
18 J36: ずっとやってて もう土日はそれで潰れちゃったりするんで
19 特にサークル入らなかったんですけど
20 J42: [あ: :]

- 21 J36: [まあ] あとはそのチーム その関係者でつくる社会人の
22 サッカーチームとかは入っていましたね。
23 だから大学の友達でサークルとかっていうよりは
24 地元の仲間であって感じで。

(1.4)

25 J40: それも楽しそうですね。

26 J42: うん。

27 J36: [そう]。

28 J42: [末永く] いけそうですね。

29 J36: そうですね。 [@@]

30 J40: [@@] 確かに地元の人間関係というのは強い。

31 J36: はい。そのおかげでなんか塾であるバイトとかしても子どもとか

32 まあ扱いが昔から その 付き合っているんで

33 すごい評価してもらったりしますよ。

34 J42: なるほど。いやあ。

(2.4)

=====

35 J36: バイトとかされていますか↑

36 J42: バイト。まあバイトなのかな これは。

37 J36: もう Ph.D. [博士までいくと]

38 J42: [いや] そう あの非常勤はバイトなのかっていう

39 今ものすごい微妙なラインを

それに対して、英語の会話では、このような明確な話題の終結部は日本語と比べて少ない。英語話者は、日本語話者に比べて話題を終結させずに、先行する話題に関連付けて話し続けていた。例えば、グループAU8では、表1で示したように30分の会話の間で明確な話題終結部は1か所しかなく、それ以外はよどみなく話題に関連付けて話し続けている。ある箇所では、話題の開始部か

ら終結部まで、話題が途切れることなく17分以上話し続けていた。その流れがあまりに長いため談話例をすべて提示できないが、以下の図1は、グループAU8で、新しい話題が導入されて、それが終結するまでの話題の流れの概要である。

この会話では、Au15、Au16、Au17の簡単な自己紹介から始まる。そして自己紹介が終了した後、Au16が他の参加者の職業について尋ねることで話題が導入される。参加者たちは各自の職業や研究分野を紹介した後、それに関連付けて今後の進路、今後出版する予定の本、その本のテーマと関連した友人のエピソード、友人の職場環境や特許、今後取りたい特許について等と話題が関連付けられながら連鎖して、とぎれることなく展開されていく。

【新話題導入】	
参加者の職業や研究分野について	
参加者の大学院生の修了後の進路について	
Au17の今後の出版予定について	
Au17の本のテーマ（成長と責任）について	
責任に関連したAu15の友人のエピソードについて	
その友人の職場環境について	
その友人の職場での特許取得について	
特許のアイデアと金儲けについて	
Au15の専門であるロボット工学で特許を取るアイデアについて	
Au15の専門であるロボット工学での修了後の進路について	
Au17の今後の出版と進路について	
【1.5秒のポーズ 話題終結】	▼

図1 AU8の話題の流れ

そして、Au17の今後の出版と進路について話している部分で、あいづちを打ちコメントを述べていたAu16の声が小さくなり、話題は終結し、その終結部で1.5秒のポーズがとられる。その後新たな話題が導入され、その話題も会話の時間終了まで途切れることなく継続していく。このような先行話題と関

日本語と英語における話題終結の相互行為：ポーズの使用に焦点を当てて

連付けながら途切れずに話す話題の展開は、会話例1のように細切れに話題を区切って話す日本語会話とは大きな違いがある。このような日本語と英語の話題管理の方法の違いが、表1の数字の違いとして現れている。

6.2 話題終結部におけるポーズの長さ

次に、話題終結部でのポーズの有無とその長さを両言語で比較する。以下の表2、3は、表1で示した各話題終結部でのポーズの長さを示したものである。単位は秒で、0.0はポーズが全くとられないまま話題が終結して次の話題への転換が生じたことを意味する。

日本語会話では、表1で示したように英語と比較して話題の終結部が多いだけでなく、そのほとんどの終結部にポーズが現れており、しかもそれが英語と比較して長いことがわかる。日本語では平均2.29秒のポーズが生じており、長い場合では、4-5秒のポーズが生じている場合もある（JA1、JA6）。

それに対して英語会話のポーズは平均0.78秒で、最も長い事例でも2.3秒である（AU5）。また、話題が終結してもまったくポーズを取らないまま新しい話題が導入される事例が、24ヶ所の終結部中7ヶ所あった。これは、日本語会話では66ヶ所中1ヶ所（JA6）であったのとは大きな違いである。

表2 日本語の話題終結部のポーズの長さ（秒）

JA1	1.3	2.3	5.0	1.8	1.7	2.5	3.0	2.8	3.5
	2.6	2.5	1.3	3.6	3.8				
JA2	0.5	1.9	1.7	0.8	2.2	1.0	1.1		
JA3	1.2	0.5	2.2	1.3	3.8	3.6	2.4	2.2	
JA4	1.0	2.6	2.1	3.0	2.8	2.0	3.5		
JA5	2.6	0.7	0.4						
JA6	2.4	0.9	3.1	3.3	4.3	3.5	1.6	3.6	3.7
	3.0	3.0	1.7	3.1	0.0				
JA7	1.2	2.6							
JA8	0.9	1.3	2.2	1.0	1.9	1.5	2.2	2.2	1.7
	3.4	1.0							

表3 オーストラリア英語の話題終結部のポーズの長さ (秒)

AU1	0.0	1.9	1.0	1.6	
AU2	0.0	0.3			
AU3	1.2	0.0			
AU4	0.0	0.0	1.0	1.5	0.7
AU5	2.3	0.5			
AU6	0.9	0.0	1.3	0.0	0.3
AU7	0.8	0.8	1.2		
AU8	1.5				

以下の会話例2は、日本語の話題終結部に見られたポーズの例である。この会話では就職活動を目前にした大学院生3人（J35、J37、J40）が、海外と日本の企業の風土の違いについて話している。海外の企業の中には、徴兵制度で3年ほど会社を空けることが許されるところもあるが、日本の企業では3年も席を空けると、帰ってきてても居場所がなくなってしまうという話をしている。

会話例2 (JA6)

- 01 J37: 3年間 ちょっと違うとこ行ってきました
 02 とかってもう何も 職が@@ [なくなって] ますよね。
 03ほんとに。@@
 04 J35: [ないっつう@@]
 05 J40: @@ まあでも逆にそういう日本企業の空気が
 06 好きだったら別に そのほうがいいと思いますけど。
 07 J37: う [: : ん 1]
 08 J35: [うん 1]
 09 J40: [日本で 2] し 働くのは 1回入っちゃえば
 10 J35: [うん 2]
 11 J37: [うん 2]
 12 J40: あとしばらくは大丈夫みたいな。

13 J37：う：：ん

(3.7)

=====

14 J37：就活はどうされるんですか↑

15 J35：就活 [ですか↑]

16 J37： [どの辺] に。はい。

(1)

17 J35：迷ってんですけどね。

この例では、07行目あたりから、J35とJ37があいづちしか打たなくなり(08、10、11行「うん」、07、13行「うーん」、話題が関連付けられながら発展することがなくなっている。そして13行目の後に、3.7秒のポーズが現れ、14行目でJ37が新しい話題(J35の就職活動)を導入している。07-11行目に見られるあいづちだけの繰り返しは、メイナード(1993)らが指摘する限られた反応で、その話題について新たな展開がないことを示す談話指標である。さらにその後に3.7秒のポーズが現れるが、ここで誰からも先行話題に関連する発話が出ないことを互いに確認しあった上で、さらに次に誰が新しい話題を提示するのかを交渉している時間であると考えられる。

一方、以下の会話例3は、英語会話に見られた話題の終結部で、全くポーズがとられない例である。参加者はAu3、Au4、Au5である。哲学を専門とする大学院生Au5は大学でチューターとしても働いている。以下は、その際の体験を語っている箇所である。

会話例3 (AU2)

01 Au4：@@ It's true to say that when the

02 teacher is enthusiastic,

03 that often makes the students

04 enthusiastic, and when the teacher is

05 not enthusiastic.
06 Au5 : Oh, yeah yeah.
07 Au4 : that does not help the students become
08 enthusiastic.
09 Au5 : But generally yeah definitely,
10 but we are, when we went for
11 epistemology that was I guess I'm
12 broadly speaking an epistemologist like
13 yes logic problems,
14 Au4 : Right yeah
15 Au5 : (X X X)
16 Au4 : Were the students similarly excited ↑
17 Au5 : Oh yeah (X X) well it all just makes
18 more sense, I think.
19 Au4 : Right.
20 Au5 : This is more immediately intuitively
21 you know appreciable.
22 Au4 : Yes.
23 Au5 : And you know consciousness is
24 ° first cause @ hard ° .
=====

25 Au3 : What are you listening to ↑
26 Au4 : Rap.

この会話では、24行目でAu5の声が小さくなり、先行研究でも指摘されるように、音調を下げることでこれ以上話すことがないことを示し、話題を終結へと導いている。しかし、その後でポーズが全くないまま、25行目で、Au3が、首にヘッドホンをかけて会話に参加しているAu4に向き直り、元の音調

日本語と英語における話題終結の相互行為：ポーズの使用に焦点を当てて

で“What are you listening to?”と彼の音楽の好みをたずねて、それまでとは全く関連性のない新しい話題を導入し話題転換を行っている。この発話を契機に、その後、互いが好きな音楽の話へと進んでいく。この話題終結部では、プロソディーで話題終結が示されているがポーズは全く生じない。また、終結後、次の話題を誰が提示するのかの交渉もほとんどなく、一瞬で新話題の導入が行われている。これは、例1のように長いポーズを用いて入念に話題の終結を確認する日本語の会話とは大きく異なっている。

6.3 話題終結に至るまでの相互行為のプロセス

次に、話題の終結に至るまでの相互行為を両言語で比較する。以下の会話例4は大学院生J33、J35、J39の会話で、12行目まではJ39の専門分野である英語の文法について話している。しかし、12行目の後2.2秒のポーズを置いて話題は終結し、13行目で新しいアルバイトの話題が導入されている。

話題が終結する12行目に至るまでの流れを見ると、話題の終結部でポーズが使用されるだけではなく、その前の10行目、11行目の後にも1秒以上のポーズが現れていることがわかる。つまり、10行目あたりから、参加者の間で、現在の話題について話すことがなくなってきたことをポーズで示し合っていると解釈できる。それに加えて、参加者たちの発話も、10-12行目では「ですね」「確かに」「そうですね」と限られた反応を示すのみで、関連話題が提示されなくなっている。さらに音調も11-12行目で小さくなっている。これらのことから、参加者の間でこの話題が終了しつつあることを相互に示し合っていると考えられる。このように、話題の終結点だけではなく、そこに至るまでの過程でポーズを何度もはさみ、さらに、音調や限られた反応等の様々な終結の指標を駆使して話題の終結を確認し合ったうえで、次の新しい話題へと移っていくことがわかる。

会話例4 (JA8)

01 J33:日本語にはそういうシステムはないから

- 02 J39: そう うん。
- 03 J33: なぜ わ そこで分けるか みたいなの。
- 04 J39: で なんかも第二外 外国語とかやるとなんか
- 05 もっと格変化の激しい
- 06 J35: うん。
- 07 J39: 言語とかあるんでわかりますけど え 英語がまだ
- 08 それに比べたらなんかまあ 楽つつたら楽。
- 09 J33: うん。
- 10 J39: ですね。
- (1.1)
- 11 J35: ° 確かに °。
- (1.1)
- 12 J33: ° そうですね °。
- (2.2)
- =====
- 13 J39: 何かバイト [とか] ↑
- 14 J35: [バイト] ですか ↑
- 15 J39: はい。

それに対して、以下の英語の会話例5は、日本語の会話と比較して話題の終結部でのポーズが短いだけでなく、そこに至る過程でもポーズが見られない。この例ではAu8、Au13、Au14の3人が話しており、この箇所ではAu13の祖母の名前が話題となっている。Au13は、生まれた際に男の子の誕生が期待されていたために祖母は男性の名前を付けられたというエピソードを語っている。17、19行目で、Au13が、祖母は93歳の今までその名前とうまく折り合いをつけていると面白おかしい様子で話すと、18、20行目で全員が笑い合い、21行目でAu8が“good”と小声で評価コメントを述べている。そして0.8秒のポーズの後、22行目でそれまでとは全く関連性のない参加者たちのその日の

日本語と英語における話題終結の相互行為：ポーズの使用に焦点を当てて

すごし方に関する新たな話題が導入されている。

この例では、日本語の例4のように、何度もポーズを重ねて話題終結を確認することはない。その代わりに、全員の笑いと、21行目の小声での評価のコメントが話題終結の標識となっていると考えられる。しかし、終結の確認の相互行為は、会話例4のそれらよりは非常に迅速で、日本人であれば唐突な話題終結と感じられそうである。

会話例5 (AU7)

- 01 Au13 : Yeah. My grandmother
02 Au8 : Uhm
03 Au13 : obviously born a woman,
04 but she was the last of six girls
05 and they are desperate for boy,
06 and they chose the name
07 as James for her.
08 Au8 : Really ↑
09 Au13 : So they just called her Jamesina,
10 Au8 : Really ↑
11 Au13 : which was really mean.
12 Au14 : Jamesina ↑
13 Au13 : That's the name Jamesina.
14 Au8 : That's really unfortunate.
15 Au13 : Yeah anyway.
16 Au8 : Did she did she cope with that ↑
17 Au13 : She is 93. She's got by so far.
18 ALL : @@@@
19 Au13 : so I think she's learnt to live with it.
20 ALL : @@@

21 Au8 : ° Good ° .

(0.8)

=====

22 Au13 : Anyway so what've you two

23 been up to today ↑ You're

24 supposed to be studying here

25 I guess.

以下の会話例6も、終結部に至る過程でポーズによる終結の交渉が見られない例である。この会話ではAu1、Au2、Au3が、友人の派手な結婚式のエピソードと関連付けて、結婚式が人生の頂点なら、その後の人生はどうなるのかと冗談めかして話している。08行目あたりから“Yeah”“It's true”という限られた反応が増え実質的内容のある発話が減り始める。それでも、日本語の会話のように話題終結の交渉過程でポーズが使用されることはない。その後15行目でそれ以上の発話がなくなり話題は終結し、1秒のポーズの後に16行目で新しい話題（Au1の新婚旅行について）が導入される。

会話例6 (AU1)

01 Au3 : How do you I mean, how do you go on ↑

02 Like if you make something so grand and so like amazing,

03 how do you go on [from there]

04 Au1 : [You just got to top it, haven't you.]

05 Au2 : It's like a birthday present situation,

06 you can't say I have an amazing birthday present

07 because each year you could just get better and better.

08 Au1 : Yeah.

09 Au3 : It's true.

10 Au2 : Yeah.

11 Au3 : So, yeah, he is he is a bit broke at the moment. (.)

12 [Yeah.]

13 Au1 : [Yeah,] as you would be.

14 Au3 : As you would be.

15 Au2 : Yeah.

(1.0)

=====

16 Au2 : So, did you do you honeymoon in Vanuatu or

17 Au1 : Yeah, yeah, we just. But again, we kept it fairly low key,

18 we just pretty much stayed at the resort and then

19 everybody left and then we just stayed there.

これらの例が示すように、日本語と英語の会話では、話題終結部のみならず、そこに至るまでの交渉の過程にもかなりの相違がみられる。日本語では、プロソディーや限られた反応と同時に、ポーズを何度か重ねることで、これ以上、関連話題がないことを入念に確認し合った後に話題が終結されていることがわかる。しかし、英語の話題終結部に至る過程では、日本語のようなポーズの積み重ねはほとんど見られない。むしろ、限られた反応や、参加者間の笑いの共有や、音調の変化等を用いて話題終結の合意が取られている。

6.4 話題終結の合意が取れない事例

一方で、話題終結の交渉は常に合意に至るとは限らない。以下の会話例7は、話題の終結のための交渉が行われているにもかかわらず合意が取れず、終結しかけた話題が1人の参加者によってさらに展開されていく例である。

この会話の参加者J36、J40、J42はいずれも大学院生で、アルバイトや朝練のために朝早く起きるのがつらいという話をしている。J40とJ42が中心となって自分の体験や友人のエピソードを語っていたが、09行目からJ36とJ40は限られた反応（笑い、「確かに」、「あ、そう」、「ふーん」）しか示さなくなってい

る。そしてその後、16行目のJ42の発話の後に3秒のポーズが生じる。17行目でJ36が短いコメントを述べるものの、その後にさらに2秒のポーズが生じる。これは明らかに、これ以上関連付けて話すことがないことを示す話題終結への交渉と解釈できる。しかし、それでもJ42だけはまだこの話題を続けたいらしく、その後も、早起きもつらいが残業もつらいという関連するエピソードを話し続け話題を展開させようと試みている（18、21－22、25行）。しかし、J36とJ40は、このJ42のエピソードにはあまり興味がない様子で、笑いや短いコメントで応じるだけで（19、20、23、24行）、自ら積極的に新しい関連情報を提供し話題を展開させることはこの後もなかった。

このように、ポーズ、音調、限られた反応等を駆使して入念に話題の終結を交渉しても、それらが参加者全員に理解され合意に至るとは限らない。終結に合意していない者は、さらにその話題を展開する場合もあるのである。

会話例7 (JA3)

01 J40：そうですね。前は学校に高校は朝8時とかだったので

02 J36：はあ

03 J40：大学入って朝9時はつらいとか。@@

04 J36：[分かります]。

05 J42：[そう]。なんか僕の社会人の友達の名言があつて

06 まあ俺そのときまだ修士1年で まあ社会も残っているなど

07 思ったんですけど つらいぞ 社会人は。毎日1限だからな

08 っていう [心を全力で折られるような]。

09 J36： [@@]

10 J40： [@@] 毎日1限@@ 確かに。

11 J42：でもうん普通に何て言うか 朝練みたいなのあるからな

12 とか言って 9時 9時 [に始まるけど]。

13 J36： [あ そう]。

14 J42：実際に行かなきゃいけないのはそれより前っていうことを

15 J36：ふ：：ん

16 J42：前言っていたと思う。

(3.0)

17 J36：確かに 分かりやすい比喻ですよ。

(2.0)

18 J42：しかも授業終わりも全然 5時で終わると思っただっていう。

19 J36：[@@]

20 J40：[@@]

21 J42：そんなわけないみたいな。ロスタイムのほうが本番より

22 長いじゃないかぐらいの [ロスタイムが]。

23 J36： [@@]

24 J40：@@ どこでそんなに損失したんだって@@

25 J42：そう 何もロスしていないけど ロスタイムは長い。

話題終結の合意が取れない事例をもうひとつ紹介する。この例では、会話例7とは逆で、話題の終結の交渉が十分に行われなにもかかわらず、強引に話題を終結させて新しい話題を導入した例である。以下の会話例8では、J36、J40、J42が話している。J42が自分の専門分野について話しており、そこに突然J36が07行目で「全然ちょっと話違うんですけど、慶應の文学部ですか？」とJ42の所属大学についてたずね始める。07行目に至るまでの箇所では、05、06行目の「ほう」という限られた反応と0.5秒のポーズは見られるが、音調の変化やポーズの積み重ねは見られない。しかし、6行目の後の短いポーズに乗じてJ36が新しい話題（〇〇先生について）を導入している。ここであえて「全然ちょっと話違うんですけど」と述べていることは、J36が先の話の終結と新しい話題の導入が強引であると理解していることを明示している。つまり、このような言い訳を述べなくてはならないほど、話題終結の交渉が十分なされないことを意味する。この新しい話題は、J36の知り合いの〇〇先生が、別の大学のJ42の知り合いでもあるかもしれないという偶然を確認しようとする

るもので、J36は強引な話題終結を行ってでも話す価値のある話題であると判断をしたようである。このように、ポーズや音調で入念な交渉を行わないままの唐突な話題終結は、発話者本人もその強引さを認めることとなっている。

会話例 8

- 01 J42:流れてて まあ今はその よん さ 1億語とか4億語レベルの
02 コーパスって呼ばれるそのテキストの集合体から
03 まあどのような え え 英語の本質が見えるかっていうのを
04 今 [分析しています]。
05 J36: [ほう]。
06 J40:ほ: :。
(0.5)

- =====
- 07 J36:全然ちょっと話違うんですけど、慶應の文学部ですか↑
08 J42:文学部です
09 J36:○○先生って=
10 J42: =○○先生=
11 J36: =まだいらっしゃいます↑=
12 J42: =まだいらっしゃいますかっていうか 僕の指導教授です。@@
13 J36: あ そうなんですね。やっぱり。

7. 考察

以上の分析から、話題の終結に至る相互行為は、日本語と英語ではかなり異なる様相を示すことが明らかとなった。

日本語の会話では、相手の話題に関連付けて話題を連続させて展開させること (stepwise-movement) が英語に比べて少ない。そのため、話題は頻繁に区切って話され (boundaried-movement)、多くの終結部が生じている。また、

その終結部に至る過程では、限られた反応、評価発話、プロソディー等を用いて話題の終結を参加者間で入念に交渉するが、その中でもとりわけポーズを多用して先行発話に関連する話題がないことを相互に確認し合っている。そしていよいよ誰からも関連話題が出ないとすると、次に新たな話題を出してもいいのか否か、誰がその話題を提供するのかを長いポーズの間に交渉し合ったうえで、新しい話題へと入っていく。

一方、英語の会話では、日本語と比較すると、先行話題に関連付けながら話すことが多く、話題を明確に区切って話すことは少ない。また、たとえ話題を区切って終結させる場合でも、終結への交渉の過程でポーズを用いることは少なく、もし用いても日本語と比較すると短い。むしろ、笑い、プロソディー、限られた反応や評価表現を用いることで、関連する話題がないことを確認し、確認が取れると、参加者の一人が素早く新しい話題を提供している。

なぜ、両者の話題終結にはこのような違いがあるのでしょうか。これは、相手や、相手の話題への関与の許容度の違いと考えることができるのではないだろうか。相手の話題に関連付けて話題を展開させることは、相手の話題、ひいては相手の領域に踏み込むこととなりうる。日本語の会話では、極力相手の話題に踏み込まず、相手に話題が尽きるところまでしゃべらせることが重視されているのだと考えられる。話題に関連付けて展開し、話題をあらぬ方向に運んでしまうことは、相手への侵害となる可能性を持つ。そのため、新しい話題を導入したければ、先行する話題に関連付けるのではなく、十分なポーズをとりながら話題の終結を確認し、相手の話題が尽きたことを確認したうえで導入しようとすると考えられる。

一方、英語の会話では、相手の話題に関心を示し、関連付け、相手の話題に関与し、日本語以上に協動的に話題を展開させることが重視されると考えられる。そのため、長いポーズは話題展開に貢献していないと解釈される可能性がある。そのため、極力ポーズは避ける必要があるし、もしポーズが生じても、なるべく早く埋めようとするのであろう。実際に大谷（2007）の調査では、英語母語話者から、会話の中のポーズに対して、「沈黙はよくない、会話に貢献

していない、埋めなくてはならないと思う」という趣旨の否定的な意見が見られた。また、重光（2015）の調査でも、オーストラリア英語の話者から沈黙のある会話は楽しめないとの意見も出ていた。

つまり、両言語の話題終結の相互行為には、それぞれの言語文化での相手や相手の話題との距離の取り方が大きく反映していると考えられる。相手や相手の話題へどのように踏み込むかは、ひいては相手のfaceにどのように配慮をするのかというポライトネスとも関連する問題である。日本語の会話例8のように、十分な交渉を行わない話題終結で、その後、自らが強引な話題終結を行ったことを認める発話がなされたのは、相手のfaceへの配慮であるためであろう。

一方、このような相違は、異文化間のコミュニケーションでは大きな問題となりうる。日本語母語話者が英語で話す際、日本語での会話と同じようにポーズを多用して入念な話題終結の交渉を行おうとすれば、それは英語話者からは誤解を受ける可能性がある。話そうとしない、話題を提供しない、会話に非協力的と解釈されるかもしれない。また、新たな話題を提供するタイミングをいくら待っていてもポーズは現れず、話題を提供できず会話に参加できない結果になるかもしれない。日本の英語教育においてインタラクション指導を行う上では、このような相互行為の対照分析の結果が十分に反映される必要があろう。

8. 今後の課題

本研究のデータは初対面会話であるため、ここで述べた結果をそのまま、両言語の全ての会話に当てはめることは難しいであろう。今後は、親密な関係の会話等も調査することで、ここに述べた特徴をどこまで一般化できるのかを考察する必要がある。また、本稿では話題の終結部だけに着目したが、今後は話題開始部や展開部も含めた話題管理全体の特徴を両言語で対照していくことも重要であろう。

謝辞

本研究は科研費基盤研究(c)(課題番号20K00849)の助成を受けたものである。

注

- 1) McLaughlin & Cody (1982)の‘minimal response’をメイナード(1993)が「限られた反応」と訳したもの。
- 2) オーストラリア人に関しては、家庭内言語が英語であることをもって母語話者と認めた。
- 3) 2人会話では、話し手と聞き手の間で発話のターンが自動的に配分されがちであるため、あえて3人の会話とすることで、発話権を取らない選択も生じるように工夫をした。
- 4) 話題の終結部は = = = で示す。

付録 文字化記号

データの文字化についてはDu Bois他(1993)を参考に、本研究の目的に合わせて一部変更、簡略化して使用した。

↑	上昇調イントネーション	@	笑い
(10)	ポーズ 数字は秒数を表す	(.)	0.5秒以下の短いポーズ
= = =	話題終結部	× ×	聞き取り不能箇所
○○	固有名詞	[発話の重複開始箇所
]	発話の重複終了箇所	[1]	発話の重複のペア
° °	音調が小さい箇所	: :	直前の音の引き延ばし
=	発話が密着している箇所		

参考文献

- Bergmann, J. R. (1990). On the local sensitivity of conversation. In I. Marková, & K. Foppa (Eds.), *The dynamics of dialogue* (pp. 201-226). New York: Harvester Wheatsheaf.
- Brown, G. & Yule, G. (1983). *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Button, G. & Casey, N. (1984). Generating topic: The use of topic initial elicitors. In J. M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 167-190). Cambridge: Cambridge University Press.
- Button, G. & Casey, N. (1985). Topic nomination and topic pursuit. *Human Studies*, 8 (1), 3-55.

- Button, G. & Casey, N. (1988-89). Topic initiation: Business-at-hand. *Research on Language and Social Interaction*, 22 (1-4), 61-91.
- Du Bois, J. W., Schuetze-Coburn, S., Cumming, S. & Paolino, D. (1993). Outline of discourse transcription. In J. A. Edwards, & M. D. Lampert (Eds.), *Talking data: Transcription and coding in discourse research* (pp.45-88). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- FitzGerald, H. (2003). *How different are we?: Spoken discourse in intercultural communication: The significance of the situational context*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Foppa, K. (1990). Topic progression and intention. In I. Markovà, & K. Foppa (Eds.), *The dynamics of dialogue* (pp. 178-200). New York: Harvester Wheatsheaf.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holt, E. (2010). The last laugh: Shared laughter and topic termination. *Journal of Pragmatics*, 42 (6), 1513-1525.
- 串田秀也 (1997). 会話のトピックはいかに作られていくか 谷泰 (編) コミュニケーションの自然誌 (pp.173-212). 新曜社
- メイナード泉子, K. (1993). 会話分析 ころしお出版
- McLaughlin, M. L. & Cody, M. J. (1982). Awkward silences: Behavioral antecedents and consequences of the conversational lapse. *Human Communication Research*, 8 (4), 299-316.
- 南不二男 (1981). 日常会話の話題の推移: 松江テキストを資料として 藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会 (編) 藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢 I 方言研究の推進 (pp.87-112). 三省堂
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995). 談話トピックの結束性と展開構造 表現研究, 62, 101-111.
- 大谷麻美 (2007). 異文化間コミュニケーションにおける topic-shift: 何がミスコミュニケーションを引き起こすのか 日本英語コミュニケーション学会紀要, 16 (1), 1-14.
- Reichman, R. (1978). Conversational coherency. *Cognitive Science*, 2 (4), 283-327.
- Riou, M. (2017). Transitioning to a new topic in American English conversation: A multi-level and mixed-methods account. *Journal of Pragmatics*, 117, 88-105.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on conversation*. Cambridge, M.A.: Blackwell.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction*. Cambridge:

日本語と英語における話題終結の相互行為：ポーズの使用に焦点を当てて

Cambridge University Press.

Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8 (4) , 289-327.

重光由加 (2015). 初対面会話で求められていること：日本語母語話者・英語母語話者へのインタビューを比較して ことば・文化・コミュニケーション：立教大学異文化コミュニケーション学部紀要, 7, 143-51.

寺内一・小池生夫・高田智子 (2008). 企業が求める英語力調査 小池生夫他編 第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究 (pp. 47-47).

West, C. & Garcia, A. (1988). Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men. *Social Problems*, 35 (5), 551-575.

Yamada, H. (1992). *American and Japanese business discourse: A comparison of interactional styles*. Norwood, N.J.: Ablex Pub.

キーワード

話題終結、ポーズ、相互行為、日本語、英語